

8月30日、老人福祉センターで

地域に広げたい ボランティアの心

新飯田中学校が、ボランティア活動について学ぶ社会福祉研究普及校の指定を受けたのは、平成二年度のこと。以来三年間、全校を挙げたボランティア活動に取り組んできました。

同校は学級数三、生徒数百三人という、大変小規模な学校です。地域的には三世同居家族が多いことから、お年寄りを対象にしたボランティア活動に目を向け、実践してきました。

同校の細貝昭平校長は「ボランティアには老人福祉だけではなく、さまざまな分野があります。しかし、生徒数が少ないこともあつて的を絞りました。これを一つのきっかけとして、さまざまな分野があることを知ってほしい」と話します。また「ボランティアという言葉は知っている

が、何をすればいいのか分からない人も多いと思います。そういう人のためにも、ボランティア活動について、地域にアピールしていきたい」とも。

活動の大きな柱は体験を目的とした実践活動です。昨年、一昨年は燕市の特別養護老人ホーム「福寿園」を訪問。今年は八月三十日に老人福祉センターを訪れ、清掃奉仕と来所者との交流活動を、また青年教育センターの清掃奉仕を行いました。

さらに地域のお年寄りに生徒たちが手紙を書き、家に届ける「レター作戦」や老人クラブとのゲートボール交流会などを実施。感謝の返事も寄せられるなど、中学生とお年寄りとの心温まる交流が続いています。

同校では普及校指定以前にも「地域クリーン作戦」や「敬老の日レター作戦」など、地域に目を向けた生徒会活動を進めてきました。それが評価され、同校生徒会は平成元年度に市の善行青少年表彰を受けています。

〔社会福祉研究普及校〕県社会福祉協議会が指定し、小・中・高等学校が対象。生徒会活動やクラブ活動の中で、社会福祉についての学習を進めながらボランティア活動の素地を作ろうというもの。今年度は県下八十一校が指定を受けている。

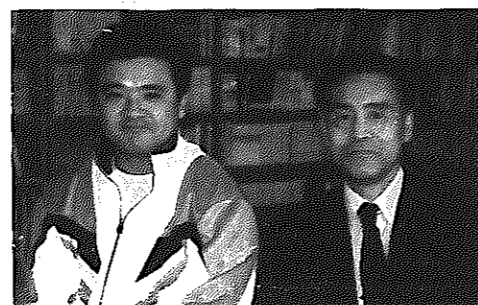


広げたい、私たちのボランティア

— 新飯田中学校 3年間の取り組み —

新飯田中学校は平成2年度から、県社会福祉協議会の社会福祉研究普及校の指定を受けています。同校ボランティア委員会が中心となり、社会福祉施設の訪問・交流活動、敬老の日のレター作戦など、地域と一体になったボランティア活動を進めてきました。今月はその取り組みの一端を紹介しながら、ボランティアについて考えてみます。

生徒の自主性に期待 学校はヒントを与えるだけ



細貝昭平校長(右)と山下春久先生

とかく受験勉強中心といわれがちな中学校の学校教育。その中で新飯田中学校には、ボランティア活動を通じ、心豊かな生徒たちがたくさん育っています。

「子供たちが本心に良くやつてくれているのでうれしい」と話す細貝校長。「ボランティアとは、気の毒な人や弱い人に対する同情ではありません。社会全体に対する思いやりの気持ちがあるボランティアなんです。その辺のところを、担当の山下先生と子供たちが、よく酌み取ってくれています」と話します。

「ボランティアへの取り組みはあくまで教育活動の一環。褒められたい、注目されたいという活動ではありません。広い心、豊かな心を持ち、人間性が高まるのが大事なことなのです。回数や規模ではありません。大きな花火を打ち上げることより、日常的な心の持ち上げること、日常的な心の持ち上げ方が大切なのです」と、子供たちへの思いを語ります。

「子供たちのボランティアに対する捕らえ方が、経験を積む中で変わってきたようです」と話すのは担当の山下春久先生。表面的な捕らえ方から、より本質的な心の問題を捕らえるようになってきた心の動きが、作文などによく現れています。

卒業生の中には、個人的に施設訪問を続けている人たちもいます。「彼女たちはごく自然にそういう行動ができるんですね」と山下先生。「学校で取り組んでいる間だけのことでなく、日常的にボランティアができる。そういう人間に育ってほしいんです」と話します。

「三年間の指定は今年度で終了しますが、もちろん活動は続きます。ボランティア活動によって得られた経験は、子供たちの大きな財産ですから」と言う山下先生。「何をするかは子供たちが考えること。学校はヒントを与えるだけ」と温かく子供たちの活動を見守ります。